

トーキーの登場と外国訛りの英語

山 口 美知代

1. はじめに¹

1.1 本稿の目的

本稿では、発声映画（トーキー）が本格的に登場したときに映画に出演する俳優の英語、とりわけ英語以外の言語を母語とする俳優の「外国訛りの英語」(foreign-accented English) が、どのように受け止められ語られていたかを、当時の新聞、雑誌記事を資料として分析する。『ロサンゼルス・タイムズ』(*Los Angeles Times*) 紙の1928年から1931年までの記事を主に用いる²。

1920年代後半に登場したトーキーは、アメリカで最初に発達した。1926年に伴奏音楽と効果音が同期された『ドン・ファン』が作られ、1927年10月に歌唱場面を同時録音した部分トーキー『ジャズ・シンガー』が公開された。最初のトーキーとして一般に描かれるのはこの『ジャズ・シンガー』で、たとえばこの時期の映画製作の楽屋裏を描いたミュージカル映画『雨に唄えば』(1952)も、『ジャズ・シンガー』の影響を受けてサイレントを急遽トーキーに変更するというプロットになっている。その後1928年には完全な発声劇映画『ニューヨークの灯』が登場し、1930年前後には「トーキー化の波」が押し寄せてきた³。本稿が扱う1928年から1931年とはこのような、本格的なトーキーの登場に続いてトーキー化が急速に進んだ時期である。

筆者は、山口(2016)で1920年代末に映画館でトーキーを見てアメリカ英語に触れたイギリス人の反応やアメリカ英語に対する言語態度を、新聞、雑誌記事から分析した。そこで明らかになったのは、あらかじめ予想されたアメリカ英語に対する否定的、批判的な反応と並んで、耳慣れない訛りを受容しようと呼びかける声の存在であった⁴。本論は、トーキーを通して外国人俳優の英語に触れた観客の反応という観点から、映画の英語に対する人々の態度を考察する。これによってトーキー登場時に映画産業と観客が経験した音声言語への反応と対応のありようの一端を明らかにしたい。

1.2 サイレントの恋人たちのトーキーでの明暗

ロナルド・コールマンとヴィルマ・バンキー。二人はハリウッドの敏腕プロデューサー、サミュエル・ゴールドウィンが売り出したサイレント映画スターである。1920年代後半、ユナイテッド・

アーティスト社で立て続けに製作されたメロドラマ『夢の楽園』、『悲恋舞曲』、『魔炎』、『スペインの花』のなかで、コールマンはバンキーを愛し、困難を乗り越えて彼女の愛を勝ち得る恋人を演じた。二人の人気はMGMのジョン・ギルバートとグレタ・ガルボに並び称せられるほどであった。⁵

ロナルド・コールマンは演劇出身のイギリス人俳優で、リリアン・ギッシュの相手役を『ホワイト・シスター』で務めたのちゴールドウィン製作映画の主演男優となっていた。⁶ 対するヴィルマ・バンキーは、第二のグレタ・ガルボを探していたゴールドウィンがブダペストで見出したハンガリーの女優である。⁷

1927年に部分トーキー『ジャズ・シンガー』が公開されたのをきっかけに、ハリウッドの映画製作は発声映画への移行が加速した。そしてサイレント映画で恋人役を演じた二人の命運が分かれた。ゴールドウィンは二人を別々の映画に主演させることで、二倍の興行収入を上げようと計画していたが、彼の目論見通りにはならなかった。

コールマンは1929年5月に公開された初のトーキー主演作『ブルドッグ・ドラモンド』(*Bulldog Drummond*)を皮切りに、「気品のある声と落ち着いた身ごなし」が好評を博し、ゴールドウィンをして「サイレント映画にチャップリンありとすれば、トーキーにはコールマンありだ!」と言わしめるまでになった。⁸

一方で、バンキーは同じく1929年5月にニューヨークで封切られた最初のトーキー『これぞ天国』(*This Is Heaven*)での「ひどい訛り」が不評であった。次の『ア・レディ・トゥ・ラブ』(*A Lady to Love*)でも事態は好転しなかった⁹。1930年にゴールドウィンはバンキーに、まだ契約が残っているので週給5000ドルはあと2年間払い続けるが、彼女の出演映画は作らないと告げた。¹⁰

残念なことに、『これぞ天国』のフィルムは現在、存在が確認できず、散逸したと考えられている¹¹。この映画でのバンキーの英語については、その音声がすでに消えているにもかかわらず、英語の訛りがひどかったという言説だけが残っている。バンキーの次のトーキー『ア・レディ・トゥ・ラブ』は一部分をインターネット上で見ることができる。¹² これを聴くと、たしかにイントネーションは英語非母語話者のものだとはすぐわかるが、内容が理解できないような英語ではない。もっともバンキーの話し方は『これぞ天国』のときよりもはるかに明瞭であったというので¹³、『ア・レディ・トゥ・ラブ』の英語から、『これぞ天国』のバンキーの英語を推測するのは難しい。

一方、コールマンの英語は、日本でも人気の高かった代表作『心の旅路』(1942)他で聞くことができる。「非のうちどころのない台詞まわしのできる、だが声が甲高いイギリス人」コールマンは当初トーキー出演に乗り気でなかったとも言われるが¹⁴、やや高めのイギリス英語でファンを魅了したのであろう。

コールマンとバルマーの明暗の違いは、サイレントからトーキーに移行した1920年代末のハリウッドで起こった数多くのできごとのひとつにすぎない。言うまでもないことだが、サイレン

ト映画のスターもそのキャリアも多種多様である。サイレント映画のスターのなかにも、トーキーに移行して活躍を続けた俳優もいれば、徐々にまたは急に、銀幕から姿を消した俳優もいた。それは英語を母語とするものも、しないものもそうであった。英語に外国語訛りがあった、というのは要因のひとつにすぎなかった。しかしそれでも、ひとつの重要な要因にはなりえたのだ。

1.3 本稿の構成

本論では、ハリウッドがトーキーへ移行した1929年前後の数年間に、外国訛りの英語が新聞記事でどのように語られたかを考察する。

第2節では、ヴィルマ・バンキーの最初のトーキー『これぞ天国』の公開前後の新聞記事で、バンキーの外国訛りの英語がどのような視点からいかなる言葉遣いで取り上げられたかを論じ、そのなかで出てくる視点を挙げる。続く第3節では、第2節で出てくる視点、言葉遣いが、バンキーに限らず他の外国人俳優の英語についても用いられたことを、例を挙げながら説明する。第4節では、外国訛りの英語に対するこのような言説の背景を考察する。

2 ヴィルマ・バンキーの『これぞ天国』の英語をめぐる言説

2.1 『これぞ天国』の英語をめぐる新聞記事

ヴィルマ・バンキーは1901年、オーストリア＝ハンガリー帝国下のハンガリーの農村ナジドログ(Nagydorog)でヴィルマ・コンチチとして生まれた。¹⁵ ブダペストで速記秘書として働きながら舞台俳優の道を目指していたバンキーは、1919年の『最後の瞬間』¹⁶ 出演を皮切りにブダペストやウィーンで製作されるサイレント映画に出演するようになり、バンキーの姓を芸名として使用し始める。

1925年、バンキーはハリウッドのプロデューサー、サミュエル・ゴールドウィンにブダペストで見いだされて渡米した。「ハンガリアン・ラプソディ」というイメージと共に売り出される。『ダーク・エンゼル』(*The Dark Angel*)に出演後、人気スター、ルドルフ・ヴァレンティノの相手役として『荒鷲』(*The Eagle*)、『熱砂の舞』(*The Son of the Shiek*)に出て、それからロナルド・コールマンとの一連の映画が続く。

ヴィルマ・バンキーの最初のトーキー出演作『これぞ天国』は1928年9月10日に撮影が始まった¹⁷。ニューヨークのパンケーキ店で働くハンガリーからの移民の女性が主人公で、店を訪れる貧しい青年と恋に落ちるが、彼は実は億万長者だったというシンデレラ・ストーリーである¹⁸。ゴールドウィンは、サイレント映画としても通用すると思われた90分の映画に、台詞付きの三場面を挿入して、これを部分トーキーにした。¹⁹

『これぞ天国』が1929年1月に完成したのち5月に公開されるまでには、ヴィルマ・バンキーの英語をめぐるさまざまな記事が書かれている。たとえば、『ロサンゼルス・タイムズ』は、多くの外国人俳優たちがトーキーに出演するために発声訓練を受けていることを書いた記事のな

かにバンキーの名前も挙げている。

(1) For example, Vilma Banky, the Hungarian actress, is studying with Nance O'Neil, eminent actress of the stage, striving to broaden her a's and sound out her f's. (LAT, Sun, Jan 20, 1929)

訳：例えばハンガリーの女優ヴィルマ・バンキーは有名な舞台女優ナンス・オニールのもとで「aの音を口を広く開けて発音し、fを声を出して発音する」練習をしている。

「fを声を出して発音する」というのは、バンキーが英語の /v/ の子音が無声音の [f] で発音するのを直そうというものである。これは後の例 (7) で love の発音について触れた記事でも言及されている。

バンキーはゴールドウィンがハンガリーで会ったときには英語が全く話せず、ゴールドウィンがハリウッドに着くまでは「ラム・チョップ・アンド・パイナップル」の4語だけを話せばいいと教えたという逸話が残っているくらいなので²⁰、英語の習得には相当苦勞をしたのであろう。

2月の『フィルム・デイリー』紙は、ゴールドウィンが当初『これぞ天国』からトーキー部分を削除して編集したことについて、映画館から苦情があったことを伝えている。

(2) Samuel Goldwyn eliminated the dialogue because he felt the picture did not need it. This brought kicks from some exhibitors, coupled with gentle kidding from some locals, who thought Miss Banky's voice would not register. Accordingly, Goldwyn accepted the challenge and the picture is to go out with dialogue. A screening here satisfied the producer that Miss Banky's voice records well, her accent even seeming light for the part of an immigrant girl.²¹

訳：サミュエル・ゴールドウィンは台詞部分はこの映画には必要ないと考えたので削除した。そのことについて映画館主からは苦情があり、また、ミス・バンキーの声（訛り）は観客に伝わらないだろうとからかう記事が地元紙に載った。そこでゴールドウィンは挑戦を受けて立ち、台詞ありで公開することにしたのだ。試写会をやってみて、プロデューサーゴールドウィンは、ミス・バンキーの声が録音に耐えることを知って満足し、また、彼女の訛りも移民の少女の役にしては軽すぎるくらいに思われたのである。

映画館主からの苦情とは、映画館はトーキーをアピールして観客を呼び込みたい希望があったからである。1927年10月の部分トーキー『ジャズ・シンガー』公開から一年余り経った1929年初めまでの時点で、全米の映画館でトーキー上映設備を備えているのは全体の四分の一だったが、その数は急速に増えつつあった。²²

記事の中の「ミス・バンキーの声（訛り）は伝わらないだろうだろう」という部分に関しては、voice という語には、「声」という意味のほかに、「訛り」「発音」の意味もあること、この時代に俳優の voice が論評されるときには、純粋な声質のみならず、発音の癖、訛りまで含めてのこと

があることに注意する必要がある。

3月にバンキーにインタビューした記者は、彼女の英語についてより具体的に次のように書いている。

(3) Miss Banky has a decided accent, but is slowly mastering English. When the squeakies came to Hollywood all the catty people said: "Now Banky and the rest of those foreign stars will be shipped back home." But Miss Banky had been studying English. When she takes her time and talks slowly she does well. At times, as she sat in the beautiful living-room of the old English house in Hollywood during this interview, she became a bit confused over choice of words and when she became thus embarrassed, laughed, shrugged her shoulders and said, "We pass that." (*The St. Louis Star and Times*, Fri, Mar 29, 1929)

訳: ミス・バンキーははっきりとした訛りがあるが、ゆっくり英語をマスターしつつある。「スクウィーキー」(トーキー)がハリウッドにやってきたとき、意地の悪い人々は「これでバンキーやほかの外国人スターたちは故郷に送り返されるだろう」と言った。しかしミス・バンキーは英語を勉強していた。時間をかけてゆっくり話すときには、ちゃんと話せる。ハリウッドにある古い英国風の美しい居間に座って私のインタビューを受ける彼女は、時々、言葉選びに戸惑い、困ってしまって、笑って肩をすくめ「そこは飛ばしましょう」と言った。

バンキーのトーキーがもうすぐ公開されることを見越しての記事であるが、インタビュワーが彼女の英語運用を試すように見ていた様子が、細部の記述から浮かび上がってくる。

公開の前の月、4月にはゴールドウィンの見解を示すこのような記事も現れた。

(4) My experience with "This Is Heaven," in which Vilma Banky is starred, shows that accent is no bug-a-boo. In the picture she plays an immigrant who becomes a waitress in a New York restaurant, so her accent is perfectly logical. I called in a representative group to see and hear the picture, and they all said: "For heaven's sake, why didn't you give us more of Vilma Banky's talking?" So I put in more dialogue sequences. She gives her scenes great feeling, depth, and beauty. If we are careful of the way we present her, people will love her talking. That is the answer to the problem of the foreign actor and actress in talking pictures. (*LAT*, Tue, Apr 23, 1929)

訳: ヴィルマ・バンキーを主人公にした『これぞ天国』での私の経験によると、訛りは心配するには及びません。この映画でバンキーはニューヨークのレストランでウェイトレスとして働く移民を演じており、その意味で、彼女の訛りは論理的なものなのです。試写会に招いた人々は、みな「一体どうしてもっとヴィルマ・バンキーの話す場面を見せてくれないんだい?」と言ったものです。なので、台詞の場面を増やしました。バンキーは大きな感情と、

深みと美しさを持って、これらの場面を演じています。我々が彼女の見せ方に気をつければ、観客は彼女の話し方を愛することでしょう。これが発声映画に外国の俳優、女優を起用するときの問題への答えなのです。

ゴールドウィンが外国の俳優がトーキーに出演して英語の台詞を話すことが「問題」であると考えており、その解決策として、訛りを持った英語を話すことが不自然でない移民である設定など「論理的」な設定を使ったと説明している。

そしてついに1929年5月後半から6月初めにかけてアメリカ全国で『これぞ天国』は公開された²³。ゴールドウィンの伝記では「ヴィルマの〔ひどい訛り〕はどの批評でもあげつらわれた」²⁴と記しているが、なるほど『これぞ天国』について紹介するのに、バンキーの英語について触れないわけにはいかなかったようである。好意的な記事の例としてこのようなものがある。

(5) Miss Banky's English has a pronounced foreign accent, but she has good diction, so that she can be understood without the slightest difficulty. Moreover, she uses her voice with fine histrionic expression, adding materially to her excellent pantomime. (*The Brooklyn Daily Eagle*, Tue, May 28, 1929)

訳 ミス・バンキーの英語は明らかな外国訛りを持っているが、彼女のせりふ回しは申し分なく、そのため理解するのはまったく難しくない。その上彼女は繊細な演技をしながら発声しているので、その優れた身振り表現が大いに豊かになる。

(6) Miss Banky brings to the speaking screen a voice that is suited to the personality which won her stardom. Her traces of accent is said to be intriguing – and necessary to the plot of the picture. (*LAT*, Tue, Jul 9, 1929)

訳：ミス・バンキーがトーキーのスクリーンにもたらした声は、彼女にスターの地位をもたらした人間的魅力にふさわしいものである。彼女の訛りの痕跡は興味をかきたてると言われている—そしてこの映画の筋立てに必要なものなのである。

一方で、バンキーの英語を否定的にとらえた記事の例として次のようなものがある。バンキーの英語が、イディッシュ語訛りの英語で知られたユーモア作家ミルト・グロスの作品の英語に似ているというのだ。

(7) In "This Is Heaven," Vilma Banky makes a noble attempt to make her Teutonic inflections sound rather Frenchy and piquante, but now and then she slips. When she says, "Doan you baleef I lahf you. Darleengk?" she comes perilously close to the Milt Gross. (*Hartword Courant*, Sun, May 26, 1929)

『これぞ天国』でヴィルマ・バンキーは自分のゲルマン語のイントネーションをフランス語風に魅力的にしようとする気高い努力をしている。「あなたを愛してるって信じないの？」と言うときには、ミルト・グロスの漫画に非常に似ている。

この記事で特に注目すべき点は、表音綴り字が用いられていることである。標準的な綴りでは、“Don’t you believe I love you, darling?” となるところで、バンキーの子音 /v/ が [f] で発音されていること、子音 /ŋ/ が [ŋk] のように発音されていることを示しているのであろう。believe を baleef と綴っているところでは、母音が異なることも示されている。二番目の母音は、ee と綴られても表す音は [i:] であろうから、標準的な音と本質的な変わりはない。しかし darling が darleengk と綴られているところでは二番目の母音が長母音 [i:] であることが示唆されていることと考え合わせると、バンキーの長母音 [i:] の使用頻度が高いこと、またはとくに長いことが強調されているのだろう。このように、綴り直しても表す音が同じ場合となる場合も、表音綴り字使用では多い。まさに「標準的でないこと」を示すために使われている視覚方言と言える。なお、laugh が lahf となっているのは、バンキーに限ったことではなく、後述するように、アメリカ英語とは異なるイギリス英語的な [ɑ:] がここで用いられていることを強調している。f の音を出す (sound out fs) とはバンキーが /v/ を無声音 [f] で発音するのを有声音 [v] にするように直すということであろう。これは例 (1) でも指摘されていた点である。

ミルト・グラスはニューヨーク生まれのユダヤ系のユーモア作家・漫画家で、とりわけイディッシュ語の影響を受けた英語を用いた作品でよく知られている。この記事でバンキーの英語がミルト・グラスに近づくというのは、その訛りのある英語のことを言っているのである。決して好意的な見方ではない。

なお記事中で、「ゲルマン語の」(Teutonic) という語がつかわれているが、バンキーの母語はハンガリー語であり、ゲルマン語ではない。ドイツ語などゲルマン語の影響を受けた俳優が話す英語がトーキーではよく聞かれることから、バンキーの外国語訛りもゲルマン語訛りと判断されたのであろう。

このように訛りについては賛否両論あるが、バンキー自身が「訛りを直す」努力をしていることも伝えられる。たとえば地元のユナイテッド・アーティスト・シアターでの『これぞ天国』公開を控えた7月初めに『ロサンゼルス・タイムズ』は、「ヴィルマ・バンキーは全国を巡りながら英語を磨く」という見出しで次のように述べる。

(8) Vilma Banky to Perfect Speech While on Tour

Vilma Banky ‘s slight Hungarian accent is said to be an asset in “This Is Heaven,” which starts at the United Artists Theater Wednesday. However, the blond star, who is one of the few foreign actresses to appear in the talkies, realizes that this accent may limit her type of roles in dialogue firms. [sic.] Therefore, she has evolved a novel means of eliminating this accent.

This actress is making a tour of the United States, and is making personal appearances in every large city in the country, with the idea that association with people in all different parts of the country will be of great help to her in making her speech truly “American.” (LAT, Mon, Jul 8, 1929)

訳：ヴィルマ・バンキーは全国を巡りながら英語を磨く

ヴィルマ・バンキーのかすかなハンガリー訛りは、水曜日にユナイテッド・アーチスト・シアターで公開される『これぞ天国』においては資産だと言われている。しかしこの金髪のスターは、トーキーに出演する数少ない外国人女優の一人なのだが、この訛りが自分の台詞映画での役のタイプを限定してしまうかもしれないと気づいている。なので、この訛りを除去する新しい方法を生み出したのだ。それは、全国を旅してまわり、各主要都市に姿を見せることである。全国各地方の人々と交流することは、自分の話し言葉を真の「アメリカ英語」にするのに役立つだろうと考えているのである。

「資産」ではあるが「役を限定する」ものなので「取り除い」て、「真のアメリカ英語」を獲得したいと考えているという記事なのである。

結局『これぞ天国』は60万ドルの製作費に対して20万ドルの赤字を出した。²⁵ バンキーはMGMに貸し出されてプロデューサーのタルバーグのもとでもう1本、今度は部分トーキーではなく完全なトーキーに出演することになる。1930年2月に公開された『ア・レディ・トゥ・ラブ』である。²⁶ 英語については「訛りはあまり気にならない」²⁷という評価がある一方「バンキーの英語はスイス訛りだということになっているが安定しない」という否定的な評価もあった。²⁸

また『ア・レディ・トゥ・ラブ』は、同じセットを使いヴィルマ・バンキーがドイツ語で演じるドイツ語版も作られた（この時期の複言語バージョンについては第4節参照）。ドイツ語版は1930年2月末にシカゴでワールドプレミアとして1週間上映された²⁹。しかし、この映画も興行的に成功とは言えなかった。

結局、ゴールウィンは契約を二年残したままバンキーに引導を渡した。バンキーは週給5000ドルを残りの二年間受け取ったが、映画界からは引退した。アメリカ人俳優と結婚しており、アメリカ国籍も取得していたバンキーは、その後ビバリー・ヒルズの邸宅で暮らし、1992年に亡くなった。

2.2 バンキーの英語について語られた点

前節(2.1)で紹介したようにヴィルマ・バンキーの英語について新聞記事は次の点に言及している。

- (9) (a) 外国訛りのある俳優の英語は観客に通じるのか (例 2、例 5)
- (b) 外国訛りの英語は役柄にふさわしいか (例 4)
- (c) 外国訛りの英語は滑稽である (例 7)
- (d) 外国訛りの英語は非標準的な表音綴り字で表すことができる (例 7)
- (e) 俳優自身は外国訛りを直そうと努力している (例 1、例 3、例 8)
- (f) 外国訛りの英語は長所であり資産である (例 6、例 8)

これらの点はバンキーに限らず、同時期の外国人俳優の英語が話題になるときに言及された。次節で『ロサンゼルス・タイムズ』の例を見ていこう。

3 外国訛りの英語をめぐる言説

3.1 外国訛りのある英語は観客に通じるのか

外国訛りの英語が通じるのかどうかは、根本的に重要な問題であった。先に例 (2) であげた「ミス・バンキーの声（訛り）は観客に伝わらないだろう」といったような懸念は、新聞記事にはあまり現れない。宣伝には逆効果であるから当然ともいえよう。

しかし、少なくとも発声映画の技術がまだ完全ではない初期においては、誰のものであれ台詞が伝わるのか、ということは大きな関心であった。次の記事がそれを伝えている。スペイン出身のアントニオ・モレノ主演の『ミッドナイト・タクシー』(*Midnight Taxi*, 1928) の映画について述べている。

(10) Its spoken dialogue, loud and unnatural in reproduction, rings with stilted accents, banal phrases. . . . Antonio Moreno, Helene Costello, Myrna Loy, William Russell, Bobby Agnew and Tom Dugan are the principals in the cast. The voices of all these, Miss Loy excepted, are heard – Russell and Dugan with most success in the naturalness of their intonations, but each one clearly enough, if clarity is the chief desideratum. Presumably, at this stage of the game, it is. (*LAT*, Mon, Aug 27, 1928)

訳：話された台詞は、その再現において声が大きく不自然で、ぎこちない訛り、凡庸な言葉遣いが響いている。(略) アントニオ・モレノ、ヘレン・コステロ、マーナ・ロイ、ウィリアム・ラッセル、ボビー・アグニュー、トム・ダガンが主要キャストである。彼らの声は、ミス・ロイの声以外は皆聞こえた。ラッセルとダガンのイントネーションが最も自然だったが、ほかの人も皆十分明瞭だった。はっきり聞こえることが最も必要なものであるなら。そして現段階ではそういうことなのであろう。

「はっきり聞こえることが最も必要なもの」という段階である。モレノ以外は、アメリカ出身の

俳優で、声が聞こえなかったとされているミルナ・ロイも英語母語話者である。1928年の段階では、まだ訛り云々以前に音として聞こえるかどうかが問題となっていた。³⁰

3.2 訛りと役柄が合致しているか

外国人俳優の英語であれ、アメリカ人の英語であれ、話す英語の訛りと役柄が合っているかどうかは、しばしば論評の対象となった。役柄にあった訛りであるという肯定的な意見は、プロデューサーから宣伝の意図で出されることが多く、逆に、役柄に合わない訛りであるという否定的な意見は批評として出されることが多いのは、当然であろう。

否定的なものとしては、たとえば『ロサンゼルス・タイムズ』の「映画の方言が手に負えない」(Film Dialect Runs Rampant)という見出しの記事がその一例である。記事を書いているイギリス人女性記者アルマ・ウィテカー (Alma Whitaker) はトーキーの英語についてのコラムが多い。

(11) A facile tounge is valuable in more ways than one in these very talkie days . . . for dialects run rampant through ever so many pictures. . . Of course, Greta Garobo's Swedish accent in "Anna Christie" is natural, and Greta will have to be cast for roles permitting of this accent for some time, until she can banish it. (LAT, Sun, Apr 27, 1930)

訳：このトーキー真っ盛りな日々では、器用な舌が非常に貴重である。(略) 多くの映画では方言が手に負えない状態になっているので (略) もちろん、グレタ・ガルボの『アンナ・クリスティ』のスウェーデン訛りは自然である。そしてガルボは、訛りを消せるまでは、しばらくのあいだこの訛りが許す役をキャスティングされなければならない。

見出しや本文で用いられる「手に負えない」(rampant) という語に、記者がトーキーの方言、訛りについて不満を持っていることが如実に表れている。グレタ・ガルボはスウェーデン訛りがふさわしい役柄に限るべきだという見解は、訛りと役柄の合致を重視する見方を示している。一方でこの記事のなかで記者は、英語母語話者の俳優が他の英語方言や外国訛りの英語を話す映画については高く評価しており、「後から身につけた外国訛りのほうがリアルな外国訛りよりよい」(Acquired Foreign Accents Often Better Than Real) とまで書いている。アメリカ生まれのゲイリー・クーパー (Gary Cooper) がスコットランド訛りの英語を使った演技や、同じくアメリカ生まれのルース・チャタトン (Ruth Chatterton) がドイツ訛りの英語を真似た演技などを絶賛している。外国人俳優の英語に対する見方との非対称性を感じさせる。

訛りについては役に合致しているかどうかが大さだというのは、もちろん外国人俳優だけに言われることではない。たとえば、次の記事は英語母語話者俳優について、この点に触れている。

(12) Johnny Mack Brown who hasn't an accent, but a good old-fashioned southern drawl was recently chosen for a lead part in a picture just because of his ability to drawl and drop his g's.

It had been said previously that Johnny wouldn't have a chance in talkies until he dropped his drawl. (LAT, Sun, Jan 27, 1929)

訳：ジョニー・マック・ブラウンは訛りはないが、昔ながらの南部の母音を伸ばす癖がある。そして、最近映画の主演に抜擢されたのはまさに、母音を長く伸ばし、また語末の g を発音しないという話し方のためであった。以前は、ジョニーは母音を長く伸ばすのをやめない限り、トーキーで望みはないと言われていたのだった。

ここで興味深いのは、アメリカ人俳優の南部訛りを、「訛りはないが、昔ながらの南部の母音を伸ばす癖がある」と表現して、英語母語話者の訛りと外国人俳優の訛りを区別しているところでもある。

一方で、外国人俳優の訛りが役柄にふさわしいことをプラスに評価する記事も多く、特にプロデューサー側から見た記事が目につく。

(13) “Oui, M'sieu” of Player is Sudden Asset

Germaine Giroux, the vivacious French beauty, who plays one of William Courtenay's assistants in “The Spider,” now nearing the end of its run at the Belasco Theater, has the true Parisian accent that is now in demand by one of the producers of talking motion pictures. . . . She was to be engaged for her looks. Now comes a producer of talkies, who is to do a story, the scenes of which are laid in Paris, and seeks to secure Germaine's accent for the screen, and Germaine herself to teach French diction to several of the other players. (LAT, Tue, Jul 31, 1928)

訳：俳優の「ウィ、ムッシュ」が突然資産に

ジャーマイン・ジルーは快活なフランス美人で、『蜘蛛』ではウィリアム・コートニーのアシスタントを演じる。この映画はベラスコ・シアターで終了間近である。彼女は真のパリっ子の訛りを持っている。これこそがこのトーキーのプロデューサーが求めていることなのだ。(略) 彼女はその外見のために契約を結ぶことになっていた。しかしトーキーのプロデューサーが来て、パリを舞台にした劇映画を作るので、ジャーマインの訛りをその映画にぜひ使いたいといい、ジャーマインに他の俳優にフランス語の台詞まわしを教えてほしいと望んでいるのだ。

ここで伝えられるのは、フランス語訛りの英語を求めるプロデューサーの話である。なおジャーマイン・ジルーはケベック州生まれのフランス語話者でパリ育ちではないが、そのことに記事は触れていない。フランス語訛りがパリのイメージにつながるということであろう。

3.3 外国訛りは滑稽である

外国訛りをはっきりと滑稽であると言い切る記事は多くない。しかし、例（11）の記者アルマ・ウィテカーはそのように言い切っている。

(14) The situation is so much more difficult for the male foreigner . . for an accent is not piquant or attractive on the male. It is even apt to make him seem effeminate and more often comical. I advised Victor Varconi for instance, to get out of it. (LAT, Sun, Aug 25, 1929)

訳：状況は外国人の男優にはより厳しい。というのも、男性の訛りというのは刺激的でもないからだ。訛りがあると男性は女性的に見えたり、しばしば滑稽に見えたりする。私はたとえばヴィクトル・ヴァルコニには訛りを直すように助言した。

3.4 表音綴り字の使用

外国訛りを非常にわかりやすく表すのが、表音綴り字の使用である。外国訛りに限らないが、標準的な発音と異なることを、非標準的な綴りで示唆するのである。

例えば、スペイン生まれの俳優アントニオ・モレノが自分の最初のトーキー『真夜中のタクシー』を初めて見たときの感想を語ったという記事を見てみよう。書き手は例（11）、（14）と同じ、アルマ・ウィテカーである。

(15) I wouldn't believe it was my voice at first, but Jack Warner assured me it was. He said I rolled my 'r's' too much, that I said thrrrrrough, instead of through, But Europeans all roll their 'r's' don't they?" he asks appealingly. (LAT, Sun, Aug 26, 1928)

訳：私はそれが自分の声だと最初信じられませんでした。ジャック・ワーナーがそうだと請け合いました。そして私がrの音を巻き舌で発音しすぎだと言いましたよ。「スルー」というところを「スルルルー」と発音しているってね。しかしヨーロッパ人はみな、rは巻き舌にするんじゃないかと彼は訴えるように尋ねる。

記者はこの引用のあと、幼い頃に巻き舌の練習として、“rrround and rrround the rrraged rrrrock the rrraged urchin rrran.”と言わされたことを書いている。巻き舌音を表記するのに、rを繰り返す表記を用いている。

アルマ・ウィテカーは、「サスペンスと葛藤」という掌編小説を『ロサンゼルス・タイムズ』に発表している。創作であり記事ではないが、ウィテカーの経験に基づいていると思われるので紹介しよう。

(16) Yvonne proved quite charming and felt that Rosalie certainly had the right idea. “Always they make me fight off zee villain,” sighed Yvonne, “and wear zee grand clothes . . . and not

know my own mind about zee young men and drive up to the smart cafes in beeg cars . . . oh, eef you can write for me a story that is deeferent, I shall be so happy.” . . . “Maybe Meester Becker, he know best,” she falterel. (LAT, Sun, Jan 5, 1930)

訳：イヴォンヌは極めてチャミングで、ロザリーの考えは間違いないといった。「私はいつも悪人をさせられるの」とイヴォンヌはため息をついた。「そしてああいう派手な服をきて。若い男性たちに対する自分の気持ちもわからず、大きな車でおしゃれなカフェに乗りつけるのよ。もしあなたが私に違った話を書いてくれたら、うれしいわ。(略) 「ミスター・ベッカーが、一番よくわかっているのよね、たぶん」と彼女は、口ごもった。

ハリウッドで映画脚本家になろうとニューヨークから移ってきたジャーナリストが、映画はいつも同じような脚本ばかりなのに嫌気がさしている話である。イヴォンヌという外国人女優に合うような脚本を依頼されるが、いつもとは違うものを書こうと提案するものの受け入れられず、最後はハリウッドを去る。このなかで、イヴォンヌの台詞は、表音綴り字で書かれている。架空のフランス人女優と思われるイヴォンヌのフランス訛りの英語が表音綴り字で記されていることは興味深い。読者にも理解されやすい状況であることを意識しての記述であろう。

標準的ではないことを示すだけでなく、差異を強調するときにも、表音綴り字は用いられる。たとえば、次の記事は、舞台俳優がトーキーに出演するときに、舞台での発声法を修正する必要があると述べた記事である。

(17) That the stage actor will have more to learn in the talkies than the film actor. Rather, to unlearn. Stage acting has been a thing of accepted conventions that are largely made up of agreed-upon affectations. These boys and girls who say “Nev-ah, nev-ah” can’t get by with it on the screen. When the words come from a close-up seven or eight feet wide, the slightest affectation becomes ridiculous and intolerable. The lines of a talkie will have to be delivered with the utmost simplicity and naturalness. (LAT, Sun, Aug 19, 1928)

訳：舞台俳優は映画俳優よりも学ばなければならないことが多い。いやむしろ、学んだことを忘れなければならない。舞台での演技は、合意されたわざとらしさから主に成り立っている、容認された習慣である。男性も女性も、ネバア、ネバアと（語尾を伸ばして）発音しているようでは、映画では通用しない。7, 8 フィート（2~2.4メートル）の幅があるスクリーンでクローズアップされたところから言葉が聞こえてくるときには、些細なわざとらしさも、滑稽で耐えられないものとなる。トーキーの台詞は、きわめて簡潔にそして自然に発せられなければならないのだ。

これは外国人俳優の外国訛りを強調しているのではなく、舞台俳優が、自然な発話では弱母音化する語末の母音を長母音にしていることを強調したものである。なお、母音のあとの r が発音

されていないのは、当時の舞台俳優の発声がイギリス英語寄りであったことを示すものである。³¹

ただし表音綴り字の表記は必ずしも一定ではない。たとえばこれは映画ではなく芝居であるが、次の記事は、『ローマへの道』でギリシャ人奴隷を演じた女優の英語が、奴隷らしくなく、「リッツ風であった」、つまり優雅であることを批判的に書いたものである。

(18) She was the Ritziest slave girl ever tied up. She said cawn't and rawther. I was bitterly disappointed when Hannibal decided not to kill her. (*LAT*, Sun, Sep 2, 1928)

訳：彼女は縛られた少女奴隷のなかではもっとも上品であった。カーント、ラーザーと言うのだ。ハンニバルが彼女を殺さなくてがっかりした。

cawn't と綴ることでアメリカ英語の [æ] を使わずにイギリス英語の [ɑ:] であったことを記しているのであろうが、一般に予想される ah という綴りではなく aw を用いている。rawther も同じである。

『ロサンゼルス・タイムズ』では極端に長い表音綴り字使用は見られなかったが、筆者がこれまでに調査したなかではイギリスの月刊映画雑誌『ピクチャーゴウワー』の記事が、外国訛りを表す表音綴り字の使用が著しく多かった。「ドロレス・イン・ロンドン」という 1928 年 10 月 1 日の記事である。

ドロレス・デル・リオ (Dolores del Rio) はメキシコ人女優である。記者は、ドロレスがロンドンに 6 日間滞在しているあいだにインタビューした。2 ページのインタビュー記事で、「黒い瞳はどこか遠くをみるような表情をみせ、一度ならず私は、彼女が私を見ているのではなく私を通してその後ろを見ているのではないかという奇妙な感覚を持った」と女優の魅力について縷々述べたあと記者は、インタビュー内容を直接話法で引用しているのであるが、その英語は、メキシコ出身の彼女のスペイン語訛りを映している。

(19) “But now eet will be deeferent,” she told me, in her delightful Spanish-American accent. . . . “Carmen, that I made for Fox, that was a terribl’ film. But zey would not lissen to me. I tell zem I know ze right customs amons’ Spanish people, but zey said, ‘we do not make zis for ze Spanish people, but for ze Americans.” (*Picturegower*, Oct 1, 1928)

訳：「でも状況は変わるのよ」と彼女は、感じの良いスペイン系アメリカ人の訛りで語った。(略)「カルメンは、フォックス社の映画だけれど、ひどい映画だったわ。でも私のいうことを聞いてくれなかった。スペイン人たちの正しい習慣を話したのだけれど、あのひとたちは「これはスペインの人のための映画ではなくてアメリカ人のための映画だから」と言いました」

ここで it が eet と綴られ、different が deeferent と綴られているのは、短母音が長母音で発音されていることを示している。また、with が wiz なのは th の音が z になっていることで、これは一、二か所だけでなく、インタビュー全体を通して、the が ze、they が zey、there が zere などと記されている。子音 t が発音されていないことを示唆するように、contrac' や subjec's アポストロフィで置き換えられている。

記者は自身の質問もときに直接話法で引用しているが、トーキーについての次のやり取りなどは、ドロレスがスペイン語訛りがあるのでトーキーを嫌っていることを間接的に示しているようである。なお、この記事が書かれた時点ではドロレス・デル・リオはまだトーキーには出演していない。

(20) “Do you think you will make a ‘talkie’ any time in the near future?” I asked her. “I nevair will. I sink zey are terribl!” She was most emphatic. “Do you know, zere is not one director or star in Hollywood who really likes ze talkies.” (*Picturegower*, Oct 1, 1928)

訳：あなたは近い将来に「トーキー」を作りますか。「絶対ありません。トーキーはひどいと思うわ！」彼女は熱心に言った。「ハリウッドには本当にトーキーが好きな監督なんて一人もいないのよ」

記者はここで自分の質問と対照させるかのように、ドロレスの英語を never の代わりに nevair、think の代わりに sink を使っている。ましてや、terrible を、語末の黙字の e をアポストロフィに置き換えて terribl' と綴っても、発音は変わらない。あきらかに悪意の感じられる失礼な表記法に思われる。(19) にみられる「気持ちのいい」(delightful) や同じ記事の別の箇所が使われる「魅力的な」(charming) という形容詞は訛りについてしばしば用いられるものであるが、これは「訛りはあるが耐えられるものだ」という恩着せがましい態度を表しているようにも思われる。

3.5 訛りを直す努力

外国人俳優が、「訛りを直す」努力をしている話題もよく取り上げられている。(21) はハンガリー出身のヴィクター・ヴァルコニについて、(22) はデンマーク出身のジーン・ハーショルトについての記事である。

(21) Accents must go, thinks Varconi. “My accent? Yes, I must lose it. Perhaps in some parts it would be good to have it. In others, no. In the majority of cases, no.” (*LAT*, Sun, Jan 27, 1929)

訛りは消さなければならないとヴァルコニは考えている。「私の訛りですか？ ええ、なくさなければいけません。訛っていたほうがいい役もあるでしょうが。ほかの役ではだめです。

大抵の場合、だめなんです」

(22) Jean Hersholt is memorizing Shakespeare and other English classics in order to rid himself of the accent which has clung to his tongue despite his years in this country. (LAT, Sun, Jan 20, 1929)

ジーン・ハーショルトはシェイクスピアやそのほかのイギリスの古典を暗唱して、何年もこの国にいるのに舌に張り付いて離れない訛りを取り除こうとしている。

外国語訛りも役柄に合っていればよいというプラス評価がある一方で、俳優自身はアメリカ英語に近づこうと努力すること、また、そういう姿を見せることが大事だったことがうかがえる。

3.6 訛りはチャーミングであり資産である

外国語訛りはチャーミングであり、資産であるという言説は思いのほか多い。これは3.2の役柄に合っているか、という視点とも関連しているが、それだけにとどまらず、俳優の演技の幅を広げるものとして評価する言説である。プロデューサーからの宣伝めいたものも多い。(23)のパラマウントのプロデューサー、ジェシー・L・ラスキーの発言はその例である。

(23) “Their foreign accents,” [Jesse L. Lasky] declared, “will not bar European players from the talking pictures. On the other hand, we have found that accents in many cases emphasize the charm of the player.”

The producer cited the Russian actress, Baclanova, in “The Wolf of Wall Street,” and Maurice Chevalier in “Innocents of Paris,” as bearing out his ideas, adding that the quality of Jannings’s voice is such that it is sure to prove an asset; (LAT, Wed, Mar 20, 1929)

訳：「ヨーロッパの俳優は外国語訛りが障壁でトーキーに出られないということはありません」とラスキーは言った。「逆に、多くの場合訛りは俳優の魅力を強調することがわかったのです。」このプロデューサーは、ロシアの女優、バクラノヴァの『ウォール街の狼』の例や、『イノセント・オブ・パリ』のモーリス・シュヴァリエを自身の考えを体現している例として挙げた。そして、ヤニングスの声の質は明らかに資産になると証明されるだろうと付け加えた。

次はドイツの作家カール・フォルメラの発言である。

(24) The foreign actor makes a mistake to leave Hollywood on account of the talkies. The foreign actor who has great difficulty to adapt himself to the stage might be perfect in the talkies. Accent gives anyone color and personality. In a story of international character, an

actor with an accent would be an asset. Players such as Emil Jannings, Dolores del Rio and Greta Garbo should be used by all means.

Jannings has his most marvelous moments on the stage when his voice gets so low that you can only tell he is speaking by the motion of his lips. In talking pictures we could move the microphone nearer to the actor and get a close-up of his faintest whisper. That would be marvelous. It would make no difference whether he spoke German or English, or had or hadn't an accent. What do we care about words? It is the feeling, the dynamic power of the sound, that we want. (LAT, Tue, Apr 23, 1929)

訳：外国の俳優がトーキーが理由でハリウッドを去るのは間違いである。舞台に適應するのが難しい外国の俳優もトーキーでは完璧かもしれない。訛りは誰にでも個性とパーソナリティを与える。国際的な話の場合、訛りのある俳優は資産だ。エミール・ヤニングス、ドロレス・デル・リオ、グレタ・ガルボなどがぜひとも起用されるべきである。

ヤニングスが舞台でもっともすばらしい瞬間には、彼の声は低すぎて彼が話しているということが唇の動きからわかるだけだった。映画ではマイクを俳優にもっと近づけて、もっとも小さなさやきさえもクローズアップで拾うことができる。なんて素晴らしいことだろう。俳優が話しているのがドイツ語であろうと英語であろうと、訛りであろうがなかろうが、関係ない。言葉など誰が気にするだろう？ 私たちが欲しいのは音のダイナミックな力、感覚なのである。

(24) のフォルメラーの発言は、1 か月前の (23) のラスキーの発言と驚くほど似通っている。また (24) の記事はラスキーが映像と音を同期する技術について述べた記事の隣に掲載されている。この時期トーキーの魅力が繰り返し伝えられた様子がうかがえる。「訛りは資産」もその一環として多用された言い回しである。もう一例挙げておこう。同じ年の 12 月のものである。

(25) In many cases, a slight foreign twang is proving to be an invaluable asset. When Alan Crosland cast about for players to support John Barrymore in "General Crack," the all-talking Vitaphone special now at Warner Brothers' Hollywood Theater, a foreign accent was one requirement for the prospective candidates. (LAT, Sun, Dec 29, 1929)

訳：多くの場合、かすかな外国訛りは計り知れない資産であることが証明されている。アラン・クロスランドが『クラック将軍』でジョン・バリモアと共演する俳優をキャスティングしたときには、外国訛りをもっていることが候補となるための要件であった。『クラック将軍』はヴァイタフォンの全トーキー映画で、ワーナー・ブラザーズ・ハリウッド・シアターで上映中。

アラン・クロスランドは 1927 年に公開されたトーキー『ジャズ・シンガー』で話題をさらった

監督である。なお、「かすかな外国訛り」というように「かすかな」という留保がついているところにも留意しておきたい。あくまでも、観客の理解を妨げない範囲、また次の例が示すような「チャーミング」と呼べる範囲のものである必要があった。

(26) Some of the foreign contingent in Hollywood have maintained that an accent, if not too pronounced, will help shade an actor's character, give color and personality to his delineation. An accent, they have said, can be very charming and add much to the delightful qualities of an individual's manner and screen presence. (LAT, Sun, Jan 27, 1929)

訳：ハリウッドの外国関係者には訛りは際立ちすぎない場合には、俳優のキャラクターに濃淡をつけたり、その輪郭に個性やパーソナリティを与えたりするだろう、と主張してきた人もいる。訛りというのは、大変チャーミングなものになりうるし、個人の様子や画面での存在感の感じのよさを大いに際立たせたりするのだ。

(27) は (21) と同じ記事からの引用で「訛りは取り除かなければならない」(Accents Must Be Removed) という見出しがついている。(26) のように「際立ちすぎない場合には」チャーミングだ、という留保があったうえで、(21) のヴァルコニの「訛りを直さなければならぬ」という発言につながっていく。

「チャーミング」が使われる別の例を見ておこう。

(27) Miss Bordoni brings to the screen all the chic and daring of her stage characterizations. Her charming French accent is heard. (LAT, Sun, Dec 29, 1929)

訳：ミス・ボルドーニは舞台で培ったシックで大胆な役作りをすべて映画のスクリーンにもたらしめている。彼女のチャーミングなフランス訛りが聞かれる。

「チャーミング」という形容詞は、表音綴り字でドロレス・デル・リオのスペイン語訛りの英語を表記した (19) の記事でも使われていた。

第2節で紹介したヴィルマ・バンキーの英語についての言説は、他の外国人俳優の英語についても言われたものであることを第3節で確認した。次節では、こうした外国訛りの英語に関する言説の背景を考察する。

4 外国訛りの英語をめぐる言説の背景

4.1 トーキーにふさわしい英語の模索

外国訛りの英語に関する言説は、トーキーに適した英語、ふさわしい英語像の模索を表している。アメリカ映画における 1926 年から 1931 年までのサイレントからトーキーへの移行期を研究

した Crafton (1999) は、トーキーの「声」が、三段階を経て変化したことを次のように述べる。この場合の「声」は、発声方法、訛りのみならず文体も含んだ音声言語による表現を広く指している。

第一に、演劇の舞台で用いられる「理想的な声のスタンダード」をモデルとした「クオリティの段階」があった。この段階では、イギリス英語がモデルとされた。次に、第一段階の反動として出てきた自然な親しみやすい声が好まれる「ナチュラリズムの段階」があった。そして最後に、クオリティとナチュラリズムを兼ね備えた、明瞭で聞き取りやすいが日常会話の自然さも感じさせる「ハイブリッドの段階」となったというのである。ハイブリッドの段階では、アメリカ英語の口語的表現が好まれる。³² 明瞭でかつ自然な英語ということである。

さて、英語を母語としない外国の俳優の外国訛りの英語は、正統な舞台で使われるようなイギリス英語でもなければ、いわゆる自然なアメリカ英語ともいえない。次の例 (28)、(29) にもあるように「ブローケン・イングリッシュ」「ピジン・イングリッシュ」とさえ表現されている。

(28) ACCENTS NOW SELLING DRAW. Broken English Suddenly All the Rage. . . . For some reason the perverse American public loves its stars with foreign accents, although, of course, the accents aren't all of it. (LAT, Tue, Jul 21, 1931)

訳：訛りが今引く手あまた。ブローケン・イングリッシュが大流行。(略) ひねくれもののアメリカ人たちは外国語訛りがあるスターがなぜか大好き—もちろん訛りだけが理由ではないが。

(29) Though Anna May Wong has a pure English accent, she is being told to practice a little pidgin English in private and we hear there is a likelihood that Sessue Hayakawa will sign a long-term contract with that organization. (LAT, Tue, Jul 21, 1931)

訳 アンナ・メイ・ウォンは純粋な英語の訛り（発音）を備えているが、彼女は密かにピジン・イングリッシュを少し練習しておくように言われている。早川雪舟も同じ組織と長期契約を結びそうだと我々は聞いている。

アンナ・メイ・ウォンはアメリカ生まれの中国系アメリカ人女優で、英語は彼女の母語であり、その発音はアメリカ英語母語話者のものである。しかし、映画で英語に中国語訛りがある役をするために下手な英語も練習しておくように言われたというのである。

前節 3.2 で紹介したような、外国訛りのある英語よりも、英語母語話者が外国訛りをまねたほうがよいという主張は、「自然な英語」と反するようにも思える。しかし、流暢さやアメリカの観客へのわかりやすさを要件とするならばそのような考え方になるのであろう。(30) はこれまでも引用してきたアルマ・ウィテカーの記事であるが、ここで彼女はヤニングスの話す英語が流暢さを欠くことが欠点であると指摘して、アメリカ人俳優が外国訛りを使った方がよいと考え

るのである。

(30) I felt that, like Jannings, his accent would impair his art, for a lack of fluency in a language makes for self-consciousness, hesitation. This is why I feel that even foreign characters, expected to speak English with an accent, are better played by American players. (LAT, Sun, Aug 25, 1929)

訳：ヤニングスのように、訛りがあるために言語が流暢に話せず自意識過剰になったり躊躇したりすると演技を損なってしまうと感じた。なので、英語に訛りがある外国人の役でさえ、アメリカ人の俳優が演じたほうがよいと私は考えている。

なおここで外国訛りを批判されているエミール・ヤニングスはこの年の5月、つまりこの記事が書かれる3か月前に第1回のアカデミー賞で主演男優賞を受賞しており、文字通りハリウッドを代表する俳優であった。

トーキーにとってふさわしい英語の声とはなんだったのかは、外国語訛りの英語にとどまらず他の要因も併せて考察すべき大きな問いである。ここでは、(21)で訛りを直さなければならないと考えていると書かれているヴィクター・ヴァルコニが、一方で、外国人俳優に求められているのは訛りではなく演技である、と述べていることも引用しておきたい。

(31) "The return of the foreign actor is not only a matter of wanting accents – it is a matter of wanting actors. The talkies have made people sense whether an actor knows and feels his lines, or whether he is just reciting them like a puppet. Even the finest, pedantic English will not carry him over if he cannot act. . . . The present rise of the older character actors," Varconi concluded, "bears out my contention that talk is not all that the people want. Whether foreign or domestic, the actors who will make good are those who can really act." (LAT, Sun, Dec 21, 1930)

訳：「外国人俳優が帰ってくるのは、訛りが不足しているからではなくて、俳優が不足しているからである。トーキーを見る人々は、俳優が台詞に感情をこめているのか、それとも人形劇の人形のように暗唱しているだけなのかに気が付く。もっとも洗練された、学術的な英語も、俳優が演技ができなければ伝わらない。(略)古い世代の性格俳優が復活しているのは人々が求めているのは会話だけではないという私の論点と一致している。外国の俳優であれ国内の俳優であれ、役に立つのは、本当に演技のできる俳優なのである。」とヴァルコニは結論として述べた。

4.2 「訛りは資産」とハリウッドの海外戦略

最後に、「訛りは資産」という表現がハリウッドのプロデューサーの言説として繰り返し現れ

る背景を考えてみよう。ひとつには、サイレント時代から、ヨーロッパの俳優をスカウトして契約を結び、ハリウッド映画のスターにしていた流れがあった。スウェーデンの女優グレタ・ガルボの大成功に続き、第二のガルボを探そうとプロデューサーたちはヨーロッパに足を運んだ。その背景には、この時期のハリウッドを支えたひとたちが、東ヨーロッパからの移民であったことがある。たとえばゴールドウィンはポーランドからの移民で、故郷の母を訪ねる旅のなかでヴィルマ・バンキーを見出している。

そうしてすでに複数年契約、複数本の映画契約を外国人俳優と結んでいるところに、トーキーの時代が到来したのである。プロデューサーも俳優も準備が整わないままトーキー製作をすることになった。サイレント映画で名前が知られ人気があるスターを起用すること、また、「ガルボがしゃべる」のように、サイレントのスターが初めてトーキーに出て声を披露することを大きな宣伝文句にすることも、興行的戦略であった。こうした構造は次の引用に端的に示されている。

(32) Doubtless this will be the attitude of most of the picture producers on Europeans, especially as these artists have already so strongly entrenched themselves in the popular favor that to dispense with them would mean a terrific loss not only in money tied up in contracts, but in public approval. (*LAT*, Wed, Mar 20, 1929)

訳：疑いもなくこれこそがヨーロッパ人俳優についての大抵の映画プロデューサーの態度であろう。特に彼らはこれまでに非常にしっかりとファンの心の中に入り込んで人気を得ているので、彼らを使わないと契約金の大きい損失となるだけでなく、観客の賛同も得られなくなるのだ。

また、ヨーロッパへの映画輸出を考える際に、外国人俳優が出演していることでその本国での興行成績が期待できるという理由もあった。サイレントからトーキーに移行することによって、言語的バリアが生じ、ハリウッド製作の英語映画の輸出に影響がでるのではないかという懸念があった。³³ その懸念が、吹き替えや字幕という、今日も用いられる技術の開発と普及によって払拭されるまでの数年間は、複言語バージョンでの映画作成も試みられた。第2節で触れたヴィルマ・バンキーの『ア・レディ・トゥ・ラブ』は、英語バージョンが撮影されたあと、バンキー主演のままドイツ語バージョンも作られたのである。大きな流れにはならなかったが、この時期には、エスペラント語のトーキーを作ることを提案する記事も現れている。³⁴

外国語訛りの英語に関する記事が新聞に多く載ったのと同じ時期に、複言語バージョンでの映画製作の話題も頻度は少ないが記事になっている。

(33) “Eventually, producers will prepare dialogue films in the majority of the standard foreign languages—French, Spanish, German, etc. The all-talking picture is here to stay and is rapidly forcing the part sound, part silent production from the market.” (*LAT*, Tue, Apr 23, 1929)

訳：最終的にはプロデューサーは主要な外国語の標準語で映画の台詞を準備することになるだろうフランス語、スペイン語、ドイツ語など。完全トーキーは去ることはなく、一部トーキーで一部サイレントの部分トーキーを急速に市場から追い出しつつある。

(34) Now we have word that even Emil Jannings, who appeared at first a trifle indifferent, if reports are true, about learning English, but who has lately taken an intensive course in four languages, is to appear in an all-talking picture.

(LAT, Wed, Mar 20, 1929)

訳：当初英語を学ぶことにはあまり関心がないと報じされていたエミール・ヤニングスが、最近では四か国語の短期集中コースを受講しており、また、完全トーキーに出演する予定だということである。

プロデューサーたちは外国人俳優の訛りのある英語を「資産」としてハリウッドのトーキーに定着させ、アメリカの観客に受け入れさせようとする一方で、このように彼らを起用した他言語での映画製作も考えていた。複言語バージョン製作は字幕、吹き替え技術の定着とともに1931年以降急速に下火になる。このようなトーキー登場直後のハリウッドが経験した混乱のなかで、外国訛りの英語は語られていた。

注

- 1 本稿は科研費研究課題「英語をめぐる言語態度の東アジア比較研究—映像メディア分析と教育的活用」(基盤研究(c) 研究課題番号16K02885 研究代表者山口美知代(50259420)による研究成果の一部である。本稿の一部は、第83回現代英語談話会(芝蘭会館、2016年9月18日)で発表した。
- 2 *Los Angeles Times* は1881年12月4日に *Los Angeles Daily Times* として創刊された日刊紙。インターネット上のデータベース Newspapers.com (<https://www.newspapers.com/>) を利用した。LAT と略す。
- 3 村山(2013)の「トーキーの到来」(p.99)の項および、p.112 参照。
- 4 山口(2016) p.13.
- 5 バーク p.264.
- 6 バーク p.206.
- 7 バーク p.209. バンキーの伝記は Schildgen (2010) 参照。
- 8 バーク p.301.
- 9 邦題未詳。
- 10 バーク p.300.
- 11 Schildgen (2010) はバンキーの生涯及び出演作について網羅的に調べた労作であるが、『これぞ天国』の現況は、「未詳。なくなっただと考えられる」と記されている (p.295)。
- 12 Schildgen (2010) p.297 によると「存在するが一般的には閲覧、入手不可。時折インターネットに海賊版あり」とされる。
- 13 Schildgen (2010) p.211 “Banky’s much improved diction.”
- 14 バーク p.285.
- 15 バンキーの生年については、1898年説、1903年説もあるが1901年と考えるという Schildgen (2010:4)

- に従う。ハンガリー語の語順では、Koncsici Vilma. パンキーは自分でつけた芸名。
- 16 *Im letzten Augenblick*. Carl Boese 監督。フィルムは現存しない。Schildgen (2010) のフィルムグラフィック (pp.272-) によるとその後の出演作は *Vita Nova* (1921), *Tavaszi szerelem* (1921), *Veszélyben a pokol* (1921), *A Halott szerelem* (1922), *Kauft Mariett-Aktien* (1922), *Schattenkinder des Glücks* (1922), *Das Bildnis* (1923), *Hotel Potemkin* (1924), *Das verbotene Land* (1924), *Der Zirkuskönig* (1924), *Das schöne Abenteuer* (1925), *Soll man heiraten?* (1925)。ハリウッドに移ってからの映画は *The Dark Angel* (1925), *The Eagle* (1925), *The Son of the Sheik* (1926), *The Winning of Barbar Worth* (1926), *The Night of Love* (1927), *The Magic Flame* (1927), *Two Lovers* (1928), *The Awakening* (1928), *This Is Heaven* (1929), *A Lady to Love* (1930), *Die Sehensucht jeder Frau* (1930), *The Rebel* (1933)。
 - 17 Schildgen (2010) p.196.
 - 18 Schildgen (2010) p.295.
 - 19 バーク (1990) p.294.
 - 20 バーク p.211-2. ゴールドウィンは「宣伝としても気がきいているし、減量にも役立つと思ったの」という。
 - 21 *Film Daily*, 7 February 1929, quoted in Crafton (1999) p.462. 下線は筆者による強調で以下も同じ。
 - 22 Schildgen (2010) p.178.
 - 23 Schildgen (2010) p.295 では公開日を 1929 年 6 月 22 と書いているが、本文中 (p.203) では「5 月下旬から 6 月初旬にかけて全国で封切られた」と記している。
 - 24 バーク p.299 thick accent は「重苦しいアクセント」と訳されているが「ひどい訛り」がより近いので修正して引用している。
 - 25 バーク (1990) p.299.
 - 26 Schildgen (2010) p.296.
 - 27 Schildgen (2010) p.211.
 - 28 *Hartford Courant*, Sat Mar 22, 1930.
 - 29 *Chicago Tribune*, Sat, Feb 21, 1931.
 - 30 トーキー最初期の録音技術については、「訛りが消えた」というような記事もある。音が未確認なので詳細は不明であるが、録音技術と関係があるかもしれない。
- “Miss Goudal, who is French by birth and talks with an accent, made talking sequences recently for “Woman of the Pavements,” a D. W. Griffith picture in which she plays one of the important roles. It was believed that Miss Goudal’s accent would register through the sound device just as it does in her usual speech. The accent was quite in keeping with the character she portrays — that of a French woman. However, when the sequence was played back, Griffith and his staff, as well as Miss Goudal herself, were amazed to find the accent almost entirely gone. (LAT, Sun, Dec 16, 1928)”
- (訳: ミス・グーダルは、フランス生まれで英語には訛りがある。D・W・グリフィス監督の『心の歌』で重要な役を演じており、そのなかで英語を話す場面があった。ミス・グーダルの訛りは、録音機器を通して、通常話すときと同様に伝わるだろうと思われていた。彼女が演じるのはフランス人女性で、訛りはその役に合っていたのだ。しかしその場面を再生してみると、グリフィスも、スタッフも、ミス・グーダルも驚いたことに、訛りがほぼ完全に消えていたのである。)
- 同種の報告は『ロサンゼルス・タイムズ』1929 年 4 月 23 日の記事にもある。イギリス人俳優レジナルド・デニー (Reginald Denny) が、マイクを通すと自分の声が完全にアメリカ化されてしまい自分のイギリス訛りが抜けたというのである。(the ‘mike’ had completely Americanized my voice and all the English accent had been lost in recording.)
- 31 なお、とりわけニューヨークで母音の後の r を発音することが階級と結びついて意識されるようになるのは第二次世界大戦後のことである。
 - 32 Crafton (1999) p.447.

- 33 ハリウッドの海外戦略については Thompson (1985)、複言語バージョンについては北田 (1997)、板倉 (2016) 参照。
- 34 “Esperant to Trail Talkies, Crepsio Thinks” (*LAT*, Sun, Nov 18, 1928) や、“How’ll They Talk In Europe? What Movie Speakies Have to Face Abroad: Esperanto Suggested as a Medium” (*LAT*, Sun, Aug 5, 1928) など。

参考文献

日本語文献

- 板倉史明 (2016) 『映画と移民—在米日系移民の映画受容とアイデンティティ』 新曜社
- 岩本憲児 (2007) 『サイレントからトーキーへ』 森話社
- 加藤幹朗 (2006) 『映画館と観客の文化史』 中央公論社
- 北田理恵 (1997) 「サイレントからトーキー移行期における映画の字幕と吹き替えの諸問題」『映像学』 59号 41-56
- 北野圭介 (2017) 『新版 ハリウッド 100 年史—夢の工場から夢の王国へ』 平凡社
- サドウール, ジョルジュ (1997) 『無声映画芸術の開花 アメリカ映画の世界制覇 [1] 1914-1920』 世界映画全史 7 丸尾定、村山匡一郎・出口丈人・小松弘訳 国書刊行会
- サドウール, ジョルジュ (1999) 『無声映画芸術の成熟 ハリウッドの確立 1919-1929』 世界映画全史 11, 丸尾定訳 国書刊行会
- サドウール, ジョルジュ (2000) 『無声映画芸術の成熟 トーキーの登音 1919-1929』 世界映画全史 12, 丸尾定、出口丈人、小松弘訳 国書刊行会
- 杉山匡一郎編 (2013) 『映画史を学ぶクリティカル・ワーズ』 フィルムマート社
- バーク, A・スコット (1990) 『虹を掴んだ男 サミュエル・ゴールドウィン』 (*Goldwin: A Biography*, by A. Scott Berg, 1989 の翻訳) 文藝春秋
- 山口美知代編 (2013) 『世界の英語を映画で学ぶ』 松柏社
- 山口美知代編 (2016) 『世界諸英語に関する理解を深めるための映画英語教育 平成 27 (2015) 年度科
研費研究課題研究成果報告書』
- 山口美知代 (2016) 「トーキーの英語とイギリスの反応—1920 年代末のハリウッド映画をめぐって—」『京
都府立大学学術報告 人文』 第 68 号 1-17

英語文献

- Altman, Rick ed. (1992) *Sound Theory Sound Practice*. Routledge.
- Crafton, Donald (1997) *The Talkies: American Cinema's Transition to Sound 1926-1931*. University of California Press.
- Gomery, Douglas (2005) *The Coming of Sound*. Routledge.
- Lippi-Green, Rosina (2012) *English with an Accent: Language, Ideology, and Discrimination in the United States*. Routledge.
- Schildgen, Rachel A. (2010) *More than a Dream: Rediscovering the Life and Films of Vilma Banky*. Hollywood: 1921 PVG Publishing.
- Thompson, Kristin (1985) *Exporting Entertainment: America in the World Film Market 1907-34*. BFI Publishing.
- Vasey, Ruth (1997) *The World According to Hollywood 1918-1939*. The University of Wisconsin Press.
- Wollen, Peter (2012) *Singin' in the Rain*. 2nd. ed. Palgrave MacMillan.

(2017 年 10 月 2 日受理)

(やまぐち みちよ 文学部欧米言語文化学科教授)